

■ 小 学 校 編 ■

郷土について語る英語力を育む外国語活動 ～ふるさと英語カルタの活用を通して～

浦安市立浦安小学校教諭 ^{たむら} 田村 ^{あつし} 敦



1 研究主題について

文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中で示されている新たな英語教育の在り方の一つに、日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実が掲げられている。

また、『新 みんなで取り組む「教育立県ちば」プラン』には、「郷土と国を愛する心と世界を舞台に活躍する能力の育成」が施策の一つとして掲げられている。これらから、子どもたちには外国語を通して海外に目を向けながらも、郷土のことを見つめ直し、郷土を愛する心を育てることも同時に求められている。

ディズニーマーケットで知られる浦安市は、漁師町として栄えた伝統ある元町と埋め立ての新興地域が共存する街で、これまで市内の各地域では、郷土に関する教育の工夫や充実が進められてきた。2011年3月には、東日本大震災によって浦安市の面積全体の86%が液状化の被害を受け、浦安市の風景は一変した。復興に向けて様々な取組が進められている現状の下、子どもたちの郷土に対する関心をより一層高めたいと考えた。

本研究ではまず、教材として「浦安英語カルタ」を作成して活動することにより、郷土について表現する英語に触れ、慣れ親しませる。次に、慣れ親しんだ表現を使って、自分の郷土について、簡単な英語を使って伝える場面を設定する。郷土に関する身近な内容を英語で扱うことによって、英語を聞いたり話したりすることへの関心が高

まり、コミュニケーション能力の素地を養うことにつながると考えられる。グローバル化の進展する現代社会においては、英語習得のみならず、我が国の歴史・文化等の教養とともに、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とコミュニケーションを取ることができる能力が求められる。本研究において、自分の郷土のことを英語で表現する体験は、グローバル化の進展の中で生きる子どもたちの一助になると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

郷土について語る力を育てる小学校外国語活動の教材を作成し、その教材を利用した指導の効果を検証する。

3 研究の実際

(1)カルタ教材の作成

郷土を表す英語に慣れ親しむための教材として「浦安英語カルタ」を作成した。絵札と読み札を用意し、浦安市に関わる観光、歴史、交通、食についての語を26項目選定した。A～Zまでアルファベット26文字に1項目ずつ設定した。項目の選定には、3・4年の社会科の副教材として使用している「わたしたちの浦安」等を参考にし、児童にとって身近に感じられる浦安のこと、児童に

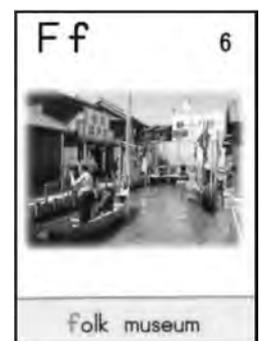


図1 絵札の例

知ってほしい浦安のことの両方が入るようにした。

絵札(図1)には写真を掲載し、視覚から英語の意味を理解し、また、郷土に関心をもてるように配慮した。

読み札(図2)には26項目にそれぞれ10文ずつ、ヒントとなる英文を作成した。

F 6		
folk museum 郷土博物館		
1	I'm a place.	私は場所です。
2	I have a pond.	池があります。
3	I have old tools.	古い道具があります。
4	You can see old house.	古い家が見えます。
5	You can see Bekka boat.	べか舟が見えます。
6	You can learn about Urayasu.	浦安のことを学ぶことができます。
7	Many children come here.	子どもたちがたくさん訪れます。
8	You can have the experiences of old job. 昔の仕事を体験することができます。	
9	You can watch the old lives by pictures and VTRs. 昔の生活を写真やVTRで見るすることができます。	
10	Old men and women play old style games with children. おじいさんやおばあさんが子どもたちと一緒に昔の遊びをしています。	

図2 読み札の例

(2)単元の指導の工夫

まず、浦安英語カルタを有効に活用して、十分に郷土について表現する英語に慣れ親しませた。(表1)十分なインプットを与え自信をもたせた上で、アウトプット活動

回	分	段階	主な活動	
			事前アンケート	
1	45	導入	郷土について伝える活動を知り、興味を持つ オリエンテーション 事前リスニング調査	
2	15		英語浦安カルタで活動することを通して、 郷土についてどのような英語で表現することができ るのかを知る	
3	15		理解	Listen and Show, Missing cards, Bingo, Karuta, What's the order?
4	15			
6	15	定着	英語浦安カルタで、活動することを通して、 郷土について表す英語表現に慣れ親しむ Card Relay, 3 hints Karuta, Concentration	
7	15			
8	45	表現	郷土について自分で紹介したいことについて 選び、どんな内容を説明するか考える	
9	45		自分が選んだ項目を、どのように英語で説 明したらよいか考え発表のためのメモを作 る	
10	45		発表のためのメモを使ってカルタ遊びをし、 英語で話すことに慣れる	
11	45		郷土のことを英語で話して伝える活動をする	
			事後アンケート 事後リスニング調査	
			遅延リスニング調査	

表1 単元の指導計画

へ結び付けた。小学生には、多くの表現を覚えたり複雑な内容を表現したりすることは難易度が高い。そこで、カルタで慣れ親しんだ表現を発表する際に使うことができるよう助言した。カルタで出てこなかった内容や表現を紹介したいと考えた児童には、小学生用の和英辞典を与えて調べさせたり、指導者やALTが個別に助言したりした。

さらに、児童が作った英語による説明の文を使い、カルタ遊びをすることで、楽しみながら英語で話す練習をすることを試みた。

単元の最後には外国人のゲストを教室に招いて、実際に児童が浦安のことを英語でゲストに紹介し、ゲストからは自分の郷土を紹介してもらう場面を設定した。

(3)検証方法

①事前、事後、遅延リスニング調査

リスニングにおいて、郷土についての英語表現にどの程度慣れ親しむことができたかを調査した。英語クイズ①として、英文を聞いて、英文の中に出てくるものを日本語の選択肢から選び、○をつける形式で10問行った。英語クイズ②として、3つの英文を聞いて内容を推測し、日本語の選択肢の中から選び、○をつける形式で10問行った。英語クイズ③として、浦安英語カルタで扱う英単語の音声を聞いて、一致する英単語を多肢選択式で選び、○をつける形式で13問行った。事後調査は単元の学習を終えたその翌日、遅延調査はその6週間後に実施した。

②事前、事後アンケート調査

児童の情意面の変化を、事前、事後ともに4段階で答えるアンケートの形式で調査した。英語の学習に対する気持ちや、郷土に対する意識などについて質問した。

(4)検証結果の分析と考察

①郷土についての英語表現への慣れ親しみ

リスニング調査のいずれの設問も、対応ありの一元配置分散分析を行った結果、事前と事後において有意差があった。また、多重比較を行ったところ、遅延調査において能力が保持されたことが確認できた(図3)。カルタを使った活動や、浦安について英語で伝える活動の中で、繰り返し聞いたり話したりすることで、郷土についての英語に十分に慣れ親しむことができたことが確認できた。

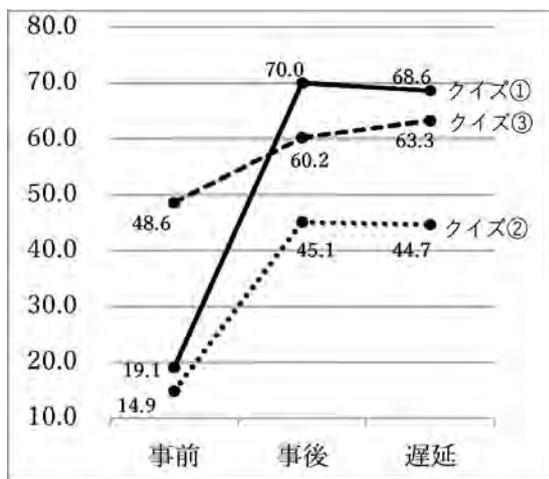


図3 リスニング調査正答率推移

また、カルタの活動で使用した英語の表現が、浦安について英語で紹介する活動に活用されていた。児童からも「カルタで学習したから、意外とすらすら言えた。」「カルタのゲームで学習したことを使って説明の文を考えることができた。」という感想があった。

②情意面の変化

「英語の学習や活動が好き」、「英語でいろいろなことができるようになりたい」という質問に事前と事後に、「4、とてもそう思う」「3、どちらかと言えばそう思う」「2、どちらかと言えばそう思わない」「1、そう思わない」の4段階で答えるアンケートを行い比較した。肯定的な回答をした児童の割合が、いずれも増えた。英語の学習に対する関心や意欲の高まりが確認

できた。また、「浦安市は、誇れる良い市だと思う」、「外国の人に浦安のことを英語で紹介したい」、「浦安のことを英語で紹介する自信がある」、「自分は浦安についてよく知っている」の郷土に対する情意面の質問についても同様に、事後において肯定的な回答をした児童の割合が増えた。自由記述には、「浦安の特色を見直すことができた。」「浦安の良いところが更に分かった。」「浦安のことをもっと知りたくなった。」等、郷土に関心を示した記述が多かった。また、「浦安の有名な物の英語の言い方がよく分かった。」「英語のきまりが分かった。」というように、言語への関心を示す児童もいることが確認できた。

以上の結果から、郷土について英語で伝える自信が付き、良く知ることができたことが、郷土への関心を高めることにつながったと考えられる。さらに、英語の学習への関心や意欲も高まったのではないかと考えられる。

4 研究のまとめ

(1)成果

郷土を題材とした英語のカルタ教材を活用することで、郷土について紹介する英語表現について、聞くこと、話すことにおいて、効果的に慣れ親しませることができた。また、郷土を英語で話して伝える活動を英語のカルタ教材を活用して展開することにより、郷土への関心を高め、理解を深めることができた。

(2)課題

郷土を都道府県や、国と置き換えて、更なる活用が期待できる。他教科との関連も考慮し、どのように活用できるかを検討する必要がある。また、カルタの活動を中学校での表現活動へ応用するなど、中学校と連携を進めたい。

中学校編

日本の伝統音楽に親しむ指導の工夫

～雅楽「越天楽」の鑑賞と表現の関連を図りながら～

香取市立佐原第五中学校教諭 藤枝美弥子



1 はじめに

教育基本法では、「伝統と文化を尊重しそれらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と伝統文化重視の方向がうちだされた。学習指導要領音楽科改訂の趣旨では、「我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度を養う観点から、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにすること」と示された。音楽科教育の中で日本の伝統音楽をより重視する傾向になったことがわかる。そこで、日本の伝統音楽に親しみ、考えを深めさせるために、鑑賞と表現の活動を関連付けることを充実させる必要があると考えた。

鑑賞と表現の活動を関連付けた指導を行うことで、音楽的な感受を働かせ、より身近に日本の伝統音楽を感じることが出来る。またゲストティーチャー（地域人材）を活用することで、より幅広い表現活動、唱歌や楽器体験を充実させることができると考えた。鑑賞から表現、そして鑑賞に戻るよう関連させ、一体とする活動につなげ、楽曲をより深く味わわせたいと考え、本研究に取り組んだ。

2 研究目標

雅楽「越天楽」において、鑑賞と表現の関連を図りながら、日本の伝統音楽に親しむことのできる指導方法を究明する。

3 研究内容・方法

(1)鑑賞指導と日本の伝統音楽の指導における実態調査と分析

①調査対象 香取市内小・中学校、香取郡中学校 24 校音楽科担当教員

②調査内容

(ア)授業実践について、

(イ)日本の伝統音楽の指導について

(2)研究主題に関する基礎的理論研究

(3)検証授業実践・分析

①対象 県内中学校第3学年 37 名

②題材名 日本の伝統音楽に親しもう
教材名 雅楽「越天楽」

4 研究の具体的内容

(1)鑑賞指導と日本の伝統音楽の指導における実態調査

地域人材の活用による授業が実施されている少数の学校では、授業が活性化されていた。しかし、どのような視点や切り口で、日本の伝統音楽を学ばせるか、ということに疑問をもち、指導を敬遠している教員が多く見られた。また単なる鑑賞で終わってしまい、教師自身の知識・技術不足から指導が深められなかった等の難しさを感じているようだ。伝統音楽の学習を通して、どのような力を身に付けさせたいのかという教員の確固たる思いを明確にし、授業に臨む必要性を感じた。

(2)検証授業の実際

【第1次 雅楽について理解する】

授業を始めるにあたり、筆^{ひちりき}の演奏による「ふるさと」をBGMで流し、音楽室に

入る段階から場の雰囲気づくりを行った。授業の導入として、日本の特徴や日本文化など知っていることを質問し、生徒の自国の文化における意識はどのようなものなのかを聞くことができた。また、現在私たちが生活の中で聞いている言葉、「千秋楽」「楽屋」「塩梅」など知っている言葉は、雅楽が語源となっていることを紹介するとたいへん驚いた様子であり、親近感が高まった場面であった。



次に本校の総合的な学習の時間において雅楽の学習を選択している生徒に、楽器の説明を担わせた。また

各楽器の音色の確認や「越天楽」の演奏を披露させた。

【第2次 唱歌・楽器体験をする】

ひちりきりゅうてきしやう
箏・龍笛・笙の先生方をお招きし、生徒たちに本物の楽器に触れ、音色に出会う場面を設定した。ゲストティーチャーの生演奏の「越天楽」を間近で聴くことができた。三管の織り成すハーモニーは一瞬にして生徒の心に浸透し音楽室の空間もいにし



えを思わせる異空間になった。生で聴く箏の音量は視聴覚教材とは全く異なるものであり、その音色に驚

かされた。身体の使い方、息の入れ方を自分の目で確認することができた。

次にグループ学習に移り、唱歌体験を行うことにより、それぞれの先生方の専門性に触れた。唱歌では、音と言葉の流れに戸惑っているグループが多かった。しかし、ゲストティーチャー



の声の出し方をまね、何度も唱えるうちにしっかりとした唱歌を唱えることができた。ゲストティーチャーから説明を受け、「雅楽師は唱歌を唱えることができて初めて楽器を持つことができる」と知り伝統音楽独特の学習方法である口伝の大切さや雅楽師の誇りを感じることができた。

唱歌がある程度の形になり、楽器にふれ音を出す体験に移った。唱歌を習ってから楽器の練習に入ることは雅楽や日本の伝統楽器では当然のこととされているが、生徒にとっては新鮮であり興味深くその活動を行うことができた。

(生徒の感想より)

- ・ 同じ指使いでも吹き方によって違う音に聴こえた。
- ・ どんどん音がでるようになった。
- ・ 音がなかなか出なくて苦労した。その分、音が出た時が気持ちよく、心地の良い音だった。
- ・ 息をつなげるのが大変だった。
- ・ 笙は息を吸っても吐いても音が出ることを経験できてよかった。
- ・ 笙は一回に6つの音が出る場所に感動した。
- ・ 簡単に音は出ると思っていたが実際は全くでなかった。

【第3次 比較鑑賞する】

管絃とオーケストラの「越天楽」を鑑賞し互いのよさを聴き取る活動を行った。第1次の鑑賞は、楽曲の全体の雰囲気をつかえる程度だった。「昔の感じ」「とてもゆっくり」「不思議な音」などのほんやりとしたものにすぎなかった。しかし、唱歌・楽器体験を行うことで、自分の体験した楽器の旋律はしっかりと耳で追うことができ、他の楽器についても入り方や間を感じ取ることができた。そしてより音の重なりや広がり意識的に聴き分け認識することができるようになったと考えられる。初期鑑賞よ

り深く鑑賞ができるようになり比較鑑賞につなげることで、自分の感受性を素直につかみ発表することができた。雅楽を深く理解し、オーケストラと比べながら互いのよさを感じ取ることができたあらわれと考える。授業最後に雅楽のキャッチフレーズを作成し、的確にふさわしい言葉を考え仕上げることができた。

5 分析と考察

雅楽に親しみやすい地域と考えていた本校だが、学習前の意識調査では雅楽を身近に感じるかの問いには27%しか肯定的ではなかった。これは行事で神事に参加したことがある生徒や総合的な学習の時間で雅楽を選択し学習した生徒のみだということがわかった。

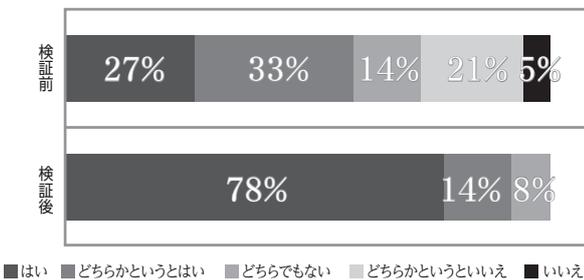


図1 雅楽を身近に感じ興味がありますか

普段の生活の中で注意深く音楽を聴くということがなされていない結果と感じた。しかし事後調査によると78%が肯定的な意見へと変化した(図1)。それは、第1次で雅楽の説明の掲示物を充実し、雅楽の歴史や現代に使われている用語などを提示したことにより、雅楽を身近に感じることができ、知識・理解が深まることに効果がみられた。また、仲間の演奏を聴き、更なる親近感と興味がわき自分にもできるのではないかという期待が心に芽生えた。楽器演奏は簡単だと思ったという意見が多く、実際に体験するとその難しさに圧倒されていた。さらに、第2次でゲストティーチャーによる唱歌と楽器体験を行うことは81%の

生徒が参考になったと感じ、肯定的意見が多くみられた。唱歌は、楽器を持つ前に習う大切な学習であるという意味や独特の発声による唱え方など参考になり伝統音楽の奥深さを学習することができた。

第3次では管絃とオーケストラの「越天楽」の鑑賞を丁寧に行うことで、比較鑑賞の質を向上させることができた。我が国や諸外国の音楽の互いのよさを感じながら比べ、共通点を見出し、多方面からの聴き方を習得し音楽を味わうことができた。何度も鑑賞し音のつながりを感じ、また体験により自分の五感で音楽を聴くことができた。雅楽を取り扱うにあたり、意識的に環境づくりを行い、体験活動を取り入れ鑑賞につなげると興味・関心は高まり、日本の伝統音楽のよさや美しさを味わうことができる有効性がみられた。

6 研究のまとめ (成果・課題)

(1)成果

ゲストティーチャーの指導による実技体験はその後の鑑賞に大いに生かされ自分の体験した楽器の音を耳で追うことができ、他の楽器も入り方や間を感じ、拍節的ではないが音楽の進行を更に理解できたと感じることができた。そして比較鑑賞においては、管絃とオーケストラでは互いのよさや美しさを理解し、味わうことができた。

(2)課題

いざ自分の思いや意図を発表するという場面では、躊躇する様子も一部の生徒にみられた。自分の言葉で他者に伝える場の設定を多く設ける必要がある。また、比較鑑賞する際には、その音楽をどのような視点、切り口で聴かせるかを明確にし、聴き取らせやすい鑑賞方法を提示することが必要と考える。

■ 高等学校編 ■

高等学校家庭科食育プログラムの開発

～食行動における判断力を育てる～

 県立成田西陵高等学校教諭 おおしま あきこ
 大嶋 明子


1 研究主題について

生涯にわたり適切な食生活を営むためには、栄養や食品等の知識を前提とした上で日常のあらゆる食行動において適切な判断を積み重ねていくことが大切である。食材選択、調理方法、食事環境などの食に関する場面において、選択する力、すなわち「判断力」が必要となる。そこで、高等学校家庭科において効果的な食育を実践するためには「食行動における判断力」を育成できるような食育プログラムを開発することが必要であると考えた。「判断力」とは、「選択力」、「決断力」であり、それを育成するためには、食に関する基礎的な知識と「批判力」が必要である。日常生活の中であらゆるものを選択していくのに「批判力」は不可欠である。具体的には、食品表示を意識し、それに疑問を持つことができるか、たくさんの健康情報の中で真偽を考えることができるか、このような「批判力」は適切な「判断力」へ導くきっかけとなるものであろう。本研究においては、食に関する今日的なテーマを設定し、生徒の内的思考を働かせるような授業を展開し、「批判力」を引き金として適切な食行動における「判断力」へつなげることができるよう教材を開発したい。

2 研究目標

食を広くとらえ、「食行動における判断力」を育成することに焦点を当てた高校生対象の「食育プログラム」を開発する。さ

らに、同プログラムの実践により生徒に見られた変容を明らかにする。

3 研究の実際

(1)研究仮説

食に関する今日的なテーマを設定した食育プログラムを作成し実践することにより、生徒の食行動における「判断力」を育てることができるであろう。

(2)研究内容

- ①研究主題に関する基礎研究
- ②食生活に関する実態調査実施及び分析
 - (ア)食生活状況調査の実施
 - (イ)食事状況調査の実施

(3)検証授業の実施

- ①対象 A 高等学校 2 学年 2 学級
- ②期間 平成 27 年 9 月の 6 時間
- ③単元 家庭総合 (4) ア, イ, エ

(4)研究の具体的内容

- ①研究主題に関する基礎研究
 - 各種文献調査。
- ②調査の実施及び分析
 - (ア)食生活状況調査の実施

全校生徒対象に平成 27 年 7 月に実施した調査において、朝食については、週 1 日でも欠食することのある生徒は男子 34%、女子 31%であった (図 1)。男女を比較すると若干男子の欠食率が高く、7%の男子が「全く食べない」と回答した。調査当日も 60 人の生徒が朝「何も食べていない」と回答した。

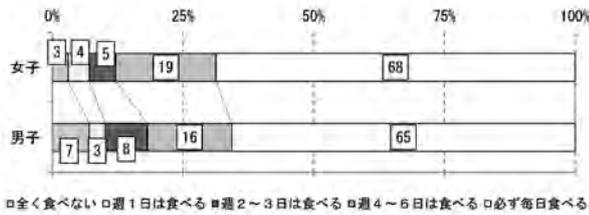


図1 朝食の摂取頻度（男女別）

(イ)食事状況調査の実施

授業実施予定の2クラス80名を対象に、7月に調査を実施した。野菜や果物をほとんど食べない生徒が目立つ（図2）。特に果物については摂取不足の生徒が多く、ビタミン類、食物繊維等の不足が心配される。

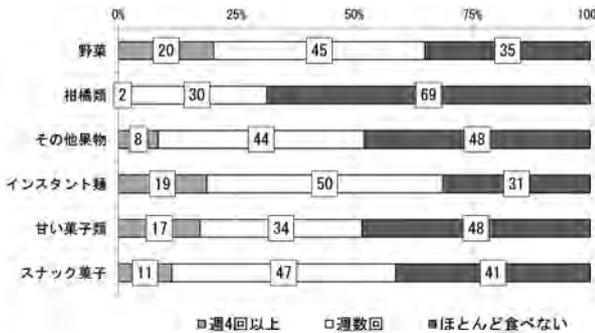


図2 最近1週間の食品の摂取頻度

インスタント麺は19%、スナック菓子は11%が週4日以上摂取されており、食品添加物や食塩、脂質等の過剰摂取が懸念される。甘い菓子類は約半数がほとんど食べないとしている反面、17%は週4日以上と、摂取が日常化している生徒も見られる。

食事状況調査の結果については、個人別の食事診断票を作成し、初回授業時に生徒に返却を行った。同診断票には、不足していると考えられる栄養素と、それを補うにはどのような食品を摂取していけばよいかということを中心にコメントを作成した。

③食育プログラム開発と検証授業の実施

本プログラムは高等学校家庭科において食行動における判断力を育成するものである。食育プログラムの構造を図3に示した。また、全体像である食育プログラムを表1に表した。

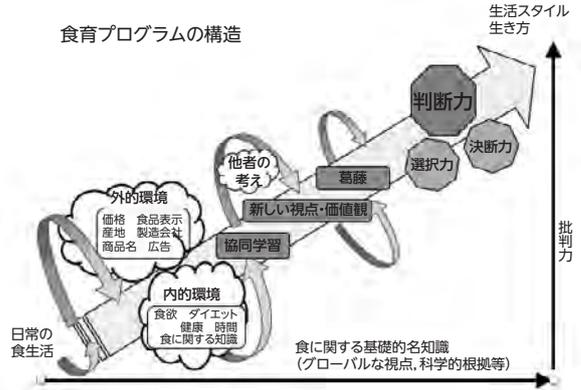


図3 食育プログラムの構造図

テーマ	学習目標	学習内容	
1	食に関する情報をどう受け取るか —ダイエツトを例に—	・1つのことに対して様々な見方があることに気づくことができる ・班活動に慣れ、積極的に参加できる	数種類のダイエツト方法を提示し、それぞれのメリット・デメリットを班で話し合い、3つ以上出し合う。話し合った結果、どのダイエツトを採用したいか選択する。
2	世界の食事情① —遺伝子組み換え食品を考える—	・食の問題は世界の大きな流れの一部分であるという概念を形成する ・身近な食品の安全性に関心を持つ	遺伝子組み換え食品にまつわる情報を20種程度提示し、情報を班活動でカテゴリー化して整理し、遺伝子組み換え食品について考えを深め、発表する。
3	世界の食事情② —食料自給率から考える—	・日本の食料自給率の低下について知り、その社会的背景や現在の自分の生活との関わりについて考えることができる	資料「知ってる?日本の食料事情(農林水産省、H27年8月)」を使って食料自給率に関する問題点を班活動でカテゴリー化してウェブマッピングに表す。
4	食品表示を知る	・食品購入の際に目にする食品表示から、どのようなことが読み取れるのかを理解することができる	例として、みそとみりんについて、食品表示から本来の自然な形のものとして人工的に手を加えたものとの違いを読み取れることを知る。人工的なものについては、その必要性やそのためにどのようなものが使用されているのかを知る。食品表示からわかる、アレルギー物質、食品添加物、保健機能食品などについて学ぶ。
5	どう選択するか —買物疑似体験から—	・決められた観点から疑似的に食材を選択することができる ・食材を選択した根拠を明確にし、班活動で人に表現することができる	チャーハンを作るために購入する食材を例に4人班で健康、安全などのそれぞれの4つ観点から食材を選択する。1人が1観点を受け持ち、なぜその食品を選ぶのかを担当の観点から理由を班員に提示する。4つの観点から議論し、結局買物するなどの食品を選択するの理由を考え、伝え合い、決断する。
6	これからの食品選択	・今後の自分の食行動において、気を付けるべきことを整理できる	まとめ、これまでの授業を振り返って、食品を選択する際に何を気を付けたらよいか考え、自分の考えをまとめる。

④検証授業の分析と考察

1 食に関する情報をどう受け取るか

メリットばかりが強調されることの多いダイエツトに対し、生徒自身がデメリットを考えてみることで消費者としての批判的な視点も必要だということを感じたという感想が多くみられた。また、当たり前を受け取っていた情報を「疑う」という視点が入ることでより選択の幅が広がることを実感した様子が感想から読み取れた。

2 世界の食事情①

遺伝子組み換え食品に対する多角的な情報に触れ、それぞれに対して他者はどう考えるのかを感じることができると授業構成と

した。今まで「知らない」で通り過ぎてきたことに対して、その是非を知ることによって選択するものが変わる。自分が賛同するかどうかは別として、批判的な意見も存在するのだということは知らなければならない。新しい知識と他者の意見により、自分の中に新しい視点・価値観が生まれた。

3 世界の食事情②

食料自給率の視点からアプローチすることで、総合的に日本の食料問題を考える授業の展開を図った。生徒たちは、普段絶えず接しているはずの食に関する事で知らないことが多くあるということに気づき、同時に知らなければならないと意識していた。食に関する新たな事実と直面し、生徒の既存の価値観にぐらつきが見られた。

4 食品表示を知る

企業側の利益、消費者の需要及び食品の安全性との複雑な絡みの中で商品が生まれ、販売されているということを広い視野で捉え、その中から批判的に考えてから、自分にとって最良のものを選択する必要があることを学んだ。

5 どう選択するか—買物疑似体験—

食品の写真カードを用い買物疑似体験を行った。反応としては、時間が足りないという声に代表されるように、本当に買物に行ったかのように集中して議論を進めていた。前4時間で得た知識や、様々な観点の存在、批判的なとらえ方などを総動員しての活動となった。

6 これからの食品選択

まとめをし、これからの食品選択について内省的に考え文章化する時間とした。

【6時間全体を通して】

全6時間のプログラムを通しての感想やアンケートを分析し、授業前後で比較した。新しいダイエットを「すぐに試してみたい」と答えた数は授業前14%、授業後6%と減

少した。食品を購入するときに気をつけることとして、産地や食品添加物と答えた数が増えた(図4)。日本の食について、「豊かで何も問題ない」と答えた数は約50%減少し、「不安がある」が増加した。

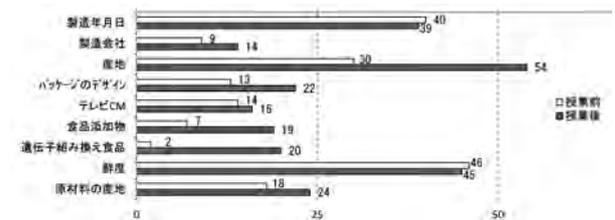


図4 食品を購入する際に気を付けること(複数回答)

アンケートから、自分とは価値観の違う人の意見を聞いて考えに広がりが出た様子や、選択の際に「もっと考えよう」という気持ちが芽生えたことが確認できた。

生徒たちは、食行動における選択の際に批判的に考え、葛藤してから選択するという行動へ変わるきっかけをつかんだように見えた。高等学校家庭科は、社会へ立ち立つ前に食について学習する最後の機会である。この時期に食品選択について意識を高めることは今後の生活スタイルを大きく左右するものであり、高校生が食行動における判断力を育成することには大きな意義がある。

4 研究のまとめ

本プログラムにより生徒の食への関心が高まり、様々な視点を得たことで批判的な見方ができるようになり、「食行動における判断力」が育成されるきっかけを与えた。

【参考文献】

- 厚生統計協会. 第3編 健康と医療の動向. 第1章 生活習慣と健康増進対策, 国民衛生の動向, 東京, p81-96, 2009.
- 白木まさこ, 大村雅美, 丸井英二. 幼児の偏食と生活環境に関連. 民族衛生, 74: 279-289, 2008
- 農林中央金庫. 現代高校生の食生活—アンケート調査に見るその特徴—. 調査と情報 2006.5